

銀

賞

『キャンバスの中の貴方』

キャンパスの中の貴方あなた

東京都 工学院大学附属高等学校二年 榊間茜里

週に二回の体育の時間。それはクラスのグループ編成を残酷に浮き彫りにする。

適当にチームをつくれという指示。適当というのだから、近くに居る誰かしらと組めば良いものを。わざわざ遠くへ出向いて、自らが所属するグループへと向かう。

版画みたいなのに、ここは背景と混ぜられないから、ここに溝を彫る。ここは同体であるから際立たせるために深く溝を作り、高低差を付ける。

そうではないと絵は完成しない。

そうではないとクラスは完成しない。

私は孤立した。パーツであり、周りに深く溝が彫られている。

別に好きで一人になってしまおうのではない。

ただ、必然的にそうなるだけ。

初めは仲良くしようと思えば良かった。私も周りと同じくやれていた。だが私のような気の弱い女は、私のことを知るや否や次第に誰の目にも映らなくなっていくものなのだ。心配すらも潰されて、惨めに消えていく。

バスケットボールが床を突いて、足や尻に振動が伝わる。聞こえる荒い呼吸。干切れそうになるほどの歓声。

時折、誰かのシューズがきゅつと音を立てて耳が痛い。

体調不良という盾に隠れて見渡す景色は青春そのもので、風船みたいだ。

男女混合チームでのバスケの試合。女子が楽しそうに男子を囁し立てる。調子に乗った男子はスリーポイントシュートを打つ。チーム問わず互いにハイタッチ。

喋喋喃喃としていた観客も、立ち上がり歓声を上げている。

私には関係ないこと。

巨大な風船は膨らみ、押し潰されていく。

「ねえ、君も見学？」

頭の上からハスキーな声がして、驚いて頭上を見上げた。

高校生活一回目の初夏。大量の人の熱気に包まれた体育館。端っこで壁に背を向け、体育座りをして小さくなった私を見つけたのは奇跡だ。

赤系のアイシャドウで囲った切れ目。すっとした鼻の下には、内側から滲んだような血色感のある唇が付いている。

「うん、そうだよ」

「ふっん。。じゃ、隣失礼」

華奢な背中を丸めて胡座で座ってしまった。

ふっと私の口角が水平になるのを感じる。

生憎あいにく持っていた愛嬌あいぎょうが裏目うらめに出た。

話しかけられたら反射で笑ってしまう癖くせ。

彼は学年で有名な男だ。

入学式、薄つきリップをつけるのはまだ分かる。だが、最近では過度なフルメイクで登校するようになった。メイク禁止の学校では異色な存在。

真っ白の中に赤いデキモノ。

共に居れば同類として腫れ物扱いされる。

こいつとは関わらない方がいい。

「絵、好きなの？」

ドキッとした。何故なぜ、知っているのだろう。

背中に生ぬるい汗が吹き出す。

「ほい、プリントの右端。先生の絵が描いてある」

彼の視線の先を追うと、仁王におう立ちする先生がプリントの中で微笑ほほえんでいる。

かっ顔に熱が集まっていくのを感じる。

昔から絵を描くのが好きだった。

皆は友情を両手に抱えていて、一方で私は大量のスケッチブックを抱えていた。

高校生になってからは絵というものを消していたはずだった。

絵は地味で暗い印象。正直、人間関係を取り持つ中で一番の重荷。だから隠していたつもりだが。風船に押し潰されないよう、スケッチブックで壁を作っていたのかもしれない。

「へえ、上手いな」

手を床に付いてぐっと顔をプリントに乗り出してくる。

あまりの近さに息が止まった。スケッチブックの山を壊され、崩れ落ちていく音が聞こえる。自分のプライバシーに踏み込まれていく感覚。眩暈がする。

湯に沈められた気分だと、彼はにっと唇を横に伸ばして笑う。切れ目はアーチ状に細くなる。

「今日の放課後、美術室来ない？」

私はどうかしていると思う。

何故、美術室の前に来てしまったのか。

湿気が籠って蒸し暑い。立っているだけでしっとり汗をかく。下ろした髪の毛が首に張り付いてきて気持ち悪い。

美術室の隣にある窓の前に水道がある。蛇口から出る水滴が日差しで光る。床には青色の水で出来た斑点模様ができている。この斑点で足を滑らせて頭を打ってしまいたい。そしたら奇跡的に彼のことを忘れてしまって、何事も無かったように帰れるのに。

なんとなく、私は彼が気になってしまったのだ。

「あれ？ 体育の時の？」

背後から声が聞こえる。振り向くと、絵の具で汚れた麻のシヨルダーバッグとキャンバスを抱えている彼がいる。

「美術室の前は暑いだろう。入りなよ」

促されるまま入ると、冷気が足元から体を冷やしてくれる。まだ掃除をしていないらしく歩くたびに、木屑と埃の雪に足跡ができる。

冷たい空気とツンとした油絵具の匂いが漂っていて、汗ばんだ肌に染み込んでいく。

エアコンの効きが良いのだと言うと彼はキャンバスを不揃いに並んだ窓際のスタンドに立てかける。

「瞬で引き寄せられてしまった。

忘我した目が振り返りこちらを覗いている。

熱くて、火傷してしまいそうな強や。

真っ赤な唇は半開きになっている。黒い艶のある髪はとても長く、肩の所で止まってそのまま足元へと流れ落ちていく。血のように赤い着物には、緻密な白いアザミの花が咲いていて美しい。

なんだろう。この絵は。

心をぐちゃぐちゃにされる。

心臓を素手で直接触れられ、揉みくちやにされる。全身に変な血が巡って苦しくなる。

「その絵、良いだろっ?」

いつの間にか油絵具の準備を済ませた彼が言う。

「俺の傑作」

□角を大きく持ち上げ、にっと笑う。

その顔がキャンバスの女性と重なる。

彼と全く似ていないのに。

彼がキャンバスの中にいる。

肌の表面に悪寒が走る。

「それは俺の脳内の彼女」

つまり、妄想の女性。だが、キャンバスの中で、呼吸をして生きている。

見惚れる私を横目に彼は新しいキャンバスをその隣に置く。

傷だらけの鉛筆を握り、横向きに立て私の方へ向ける。

「次は実在する人を描きたい。君で良い?」

そう言うのと片目を瞑り、親指の爪で鉛筆に印を付け、私の身体を測り出す。

その場で固まる。被写体を見つめる目。

私を苦しいくらいに掴んで離さない。

彼の瞼に塗られた、フェミニンなアイシャドウの大きめのラメが光る。

冬みたいな空調の中、夕陽ゆうひで肌が焼けるように痛い。
私は彼という名のUVレジンで固められてしまった。

「奏！ 筆は洗えと言ったでしょう？」

「洗えと言われたら嫌になるのです。」

「はっ。」

「ごめん、ごめんといい、彼はパレットを雑巾ぞうきんで雑に拭ふいている。反省の色など何もない。溜息ためいきが出る。

高校が上がってから二回目の春。柔らかい昼の日差しが肌を温める。水道の前にある窓からは、桜の花びらがちらちらと降る街が見える。

放課後、美術室へ向かおうとした。

だが、準備室の棚にぶつかった拍子ひょうしに絵の具が固まって凶器と化した大量の筆が、頭に落ちてきた。さらには赤い絵の具が山になっているパレットが私の頭に直撃ちよくげきした。

くらくらする頭を押さえ、教室に戻り、爆睡ばくすいしている元凶犯げんきょうぼうを叩き起こして手伝わせ、現在に至る。

「夏海は几帳面きちょうめんだね。俺は使う時に洗う」

「筆が痛むよ」

「気が向いた時に好きな絵を描いて、好きな時に筆を洗うのだ。それが俺のモットーだ」

「それを後回しの言い訳して言うのだよ」
またしても溜息が出る。なぜこの男に惚れ込んだのだろつとつくづく思う。

去年の夏の日。

あの日以来、私は彼が待つ美術室へ通うようになった。彼との時間が妙に心地良かったのだ。クラスメイト達の強くて太い大河のような会話とは違う。湧き水みたいな断片的な会話。だとしても彼のフレンドリーな人柄であつという間に打ち解けてしまった。

ここまで来るともう戻れない。

周りに低評価されようと何も気にならない。彼の魅力に堕ちていく感覚。悪くはない。

「そついでだよ」

彼がパレットを拭く手を止める。

「夏海は、何で風景画を描くの？」

筆を洗う手が止まる。

「初めて会った時、人物画が好きなのかなって思った」

心臓が飛び跳ねる。

確かに、私は人物画が好きだ。

誰かの世界に飛び込んでしまえば、現実が何も見えなくなっていく。自分が存在しているのか分からなくなる

ほどに吸い込まれる。引力は私を漬すのではなく、彼らの世界に入れてくれる。

時折心配になって、服の素材の感触に意識を向ける。布を感じるたびに、自分の体は存在しているとやっと認識することができるのだ。

「夏海の人物画、凄くなって思った。壮大な旅をしている感じ」

そう言う手元のパレットに視線を落とす。もう乾き切ったパレットを雑巾で丁寧に拭いていく。

「俺、もっと夏海の人物画が見たくて美術室に誘った。何で風景画ばかり描くの？」

人目に晒されたら、漬されてしまつかもしれないから。

芯の通った人が描けば、白ずとぶれない絵になる。柔らかい雰囲気の人が描けば、ほんわかした絵になる。

もし、私が人物画を描くとしたらどうなるだろう。風に飛ばされて、見ず知らずの他人に漬されてしまつと思ふ。事実、あの体育教師の絵もそうだった。仁王立ちする彼女はどこか頼りなく、すぐにミンチにされそうな感じ。好きなものを踏まれるよりも、好きでもないものを踏まれた方がいい。

「俺はお前の人物画が好き。だから、今度見せてよ」

オレンジブラウンのアイシャドウで囲まれた目の目尻が下がる。相変わらず、にっと笑う唇。今日は彼が我慢の、温かみのある春の新色リップだそうだ。

彼は足元の棚にパレットをしまう。下を向いたと同時に見える、無防備な首。跡が残るほどに強く噛んでやりたい。顔を歪めて痛がる彼を見たい。触れたいけれど、触れてはならない。もどかさから気を紛らわそうと、水道を捻る。無色透明な水が筆についた絵の具でシンクに紅色の川ができた。

あの日から一体どのくらいの日が経ったのだろう。

散々鳴いていた蝉は地を這い、知らず知らずのうちに死んでいる。天気が不安定な日、空気は水を吸って冷たくて重い。冷房の代わりに、秋の冷たい空気が美術室を満たしている。もう、絵の具の匂いなどしない美術室。

筆はふさふさなままだし、パレットには何も付いていない。ただ、平然とあるべき場所に立ち並ぶ。奏は死んだ。

おもちゃが電池を切らしたように途絶えた。

夏休み明けの日、彼の机には一輪のたんぽぽみたいな菊が咲いていた。涙ぐみながら話す担任。もらい泣きする女子と俯く男子。

背中をさすってやったりして励まし合うクラスメイト。

一体彼らは奏の何なのだろう。

担任は彼に対して好意的だった。

でも、クラスメイトは一方的に避けていた。異質な存在、関わりたくない存在として。

今はただのクラスの一体感を強める為の道具でしかない。小さな私はやるせなさに首を絞められる。縋るよう
にぎゅっとスカートを握った。

数日間学校には行けず、家に引きこもっていた私は今、放課後の美術室にいる。

空に灰色の雲が猛スピードで走っている。

私は真っ白なキャンバスを前にしている。

本当は絵など描けたものじゃない。

でも、描きたい。

四六時中泣いたせいで、外の雲みたいな灰色の霧が心の中で渦巻いている。目を瞑ると、じんわりと涙が沁みていく。そして、彼が描いた私の絵がじわりと浮き上がってくる。

彼が亡くなった翌日、彼の母親が彼の遺品を持ってきた。重たいキャンバスだった。

あの日の、絵。

奏と出会った日、美術室で描いた最初で最後の私の絵。彼は見せたくないと言い、自宅へ持ち帰ってしまった。絵。こんな形で再会すると思わなかった。

キャンバスに浮かぶ私は何とも言えない表情をしている。悲しいような嬉しいような。

彼の前でこんな顔をしていたのだろうか。

ミディアムヘアの猫毛がふわふわしていて落ち着がない。だが、弱々しい垂れ目は一点に奏を見つめている。

キャンバスには私が居るのに、彼が居る。

殻ごと彼色に染まって、私は彼に喰われている。にっと笑う彼が居る。

今頃気づいた。

初めて美術室に入った時から、私は丸ごと彼に喰われ、飲み込まれていたのだ。

一瞬にして私は彼のものとなっていたのだ。

震える手を押さえ付けて、尖った鉛筆を握る。大丈夫。私の中には奏がいる。

輪郭を描いて、鼻を描き、目と口を描く。

濃く、赤系メイクを強調させる。キラキラと光る大きなラメには、あえて布の白を残す。

彼がメイクをしていたのは、ただのおしゃれではない。

彼の死後、日に日に悪くなっていく顔色を隠すためだと担任は打ち明けた。メイクの許可を貰い、先生達は目を瞑っていたそうだ。

段々と濃くなっていったのは想定外で、注意はしたがとても嫌がったらしい。

少しの隈も、少しでも紫になった唇を晒したくなかったのだ。

好きな時に、好きなことをしたい。そう言っていたのを思い出す。だから道具も洗わなかったし、無許可で突然私の絵を描いた。

病気だから、寝ていなさい。病気だから、早く帰いなさい。病気である事を理由に、自分の行動を制限されなくなかったのだろう。

彼の白くて細い首を描く。

色は一期一会なのだ。二度と同じ色は作れない。せつかくなら毎回史上最高の色を作りたい。パレットを前にすると彼は決まって顔を前のめりにして、パレットに顔を近づける癖があった。そのせいで首が痛いと言いつつながら笑っていた。集中力を切り、楽しそうに私の方を向く。

その時の笑顔が、好きだった。

鉛筆が彼の華奢な肩を滑る。

絵を描いている時、彼は呼びかけても絶対に気づかない。口を半開きにして、我を忘れた顔。だから、肩を搦んで呼ぶ。

彼の肩は薄いけれど、頼り甲斐がある。シャツを通り抜け、彼の熱い体温が手のひらからじんわりと私の中で広がっていく。手のひらから身体の隅に伝わる体温が好きだった。

あの熱こそが彼の原動力。好きなものにとことん邁進する熱。

彼の熱は、誰にも潰すことはできない。

あの赤い着物を着た女性は奏そのものだったのだ。

どうしよう。

次々と彼の事を思い出す。

想いのコップはどんどん溢れて、両手でも受け止めきれなくなっている。思い出という名の重石がコップの中に次々と入ってきて体積が増し、さらに溢れる。

どうしようもなくて、でも、どうしようもなく幸せで、痛くて、涙が止まらない。

心の淵がギリギリと焼けていく。焼けて灰になってしまう。

灰を彼に向けて吹きかけてやりたい。

きつと彼は咽せるだろう。

それでいい。彼の身体に入ってしまうのならば。

キャンバスでにと笑う彼が、真つ暗な美術室にいる。

紛れもない、初めて会った日の奏。

でも、その中には私が佇たずんでいる。

奏と一緒になら、何も怖くない。

震えていた手は、冷静を取り戻している。

だが頬ほおは熱くて火照ほっている。視界はぼやけていて、窓から見える街灯りでキラキラとしている。

涙が重くなって下を向いた。私が描いた風景画はいつの間にか全て足元に落ちていて、一つ、二つ涙の染みが出来る。

完成した絵を、そつと灰色の窓際のスタンドに立てる。

するとツンと絵の具の匂いが、風と共に私の前をよぎった気がした。